

私たちは生きる

乳がん37人の体験

ワット隆子編

「片方あればいいがな」と彼。
「ほんとうでも、両方なくなつた
それはそれでええがな」と彼。

同朋舎

この三日間、私のうちで「たましつづけていた」どうしても生きなくてはならないの言葉を
ゆつくり、はつきりと「度くりかえすと、やっと覚悟ができました」。



私たちは生きる 乳がん37人の体験

1989年6月30日第1版第1刷発行

1989年9月5日第1版第3刷発行

編者——ワット隆子

発行者——今田 達

発行所——株式会社同朋舎出版

本社／〒600 京都市下京区中堂寺鍵田町2

電話 代表(075)343-0621

東京支店／〒101 東京都千代田区神田駿河台2-11-1

電話 代表(03)292-2021

郵便振替／京都5-22982

印刷所——東洋紙業株式会社

製本所——東洋紙業株式会社

はじめに——生の証——

ワット隆子

朝、起きるとすぐ着がえをし、下へ降りてカーテンを開けます。私の家は借家で、寝室は二階にあります。一日のはじまり。起きる前に頭のなかで原稿や手紙の中身を考えていますから、机に向かうとすぐに書きはじめます。そして六時。朝刊が郵便受けに入る音を聞くと、なにをおいても、すぐとりにいきます。その間、熱い紅茶にミルクをたっぷり入れたのを二、三杯のんでいます。

こんなふうに私の朝ははじまるのですが、六時半には子どもたちをたたき起こし、朝食を食べさせて学校へ送りだしますので、時間がすぐにたつてしまい、身を入れて書きものはできません。そのうち、九時をすぎるといろいろ電話が入ったりして、いそがしくなります。

そしてお昼。おなかがすいた、ラーメンでも食べようつと。テレビをつけてチラッとみたり。「あけぼの会」事務局の常駐事務員は私一人。四六時中、会の仕事をしているわけで、家事は仕事の合間にやります。夜になって掃除機をかけはじめたり。家政婦さんはいないので、普通の主婦と同じように、主婦業全部をこなしています。

一日は短くて、朝開けたばかりのカーテンを、すぐに閉めなければなりません。あーあ、また一日終わっちゃった——と実感します。

私が手術したのは一九七七年。もう十二年もたったので、今では普通の人と同じ感覚で生きていますが、それでも手術後一年間くらい精神が錯乱し、気があせて、一日一日をどう生きればよいのか、自問した日々を忘れません。手術したばかりのかたのなかには、まだ精神的にすっかり立ちなおれなくて、悩み苦しんでいらっしやるかたが、少なくないでしょう。

はじめに不安ありき。そしてその次は、開きなおって、ええい、ままよ、一日一日を悔いなく生きれば、ノホホンと長生きする人よりマシだ、という結論に到達。いつとき気がらくになります。暗雲去って心おだやか。しかしすぐに、新しい自問がはじまります。

「悔いなく生きるとは、どう生きることなのか」

さて、答えは誰も教えてくれません。懸命に考えても、朝がきてカーテンを開け、夜がきて閉じて一日がすぎてしまう。答えがわかるまで、時は止まって待っていてくれません。それでまた、あせります。早く悔いなく生き方をはじめないと、もうすぐ死んでしまうかもしれないというのに——。これで私は、ノイローゼのようになりました。どうしたらよいでしょうか。まず、朝のカーテンを開けるその場所が、私たちが今まで生きてきて、これからも生きていく場であることを再認識することです。悔いなく生きるためといって、誰もかれもがニューヨ

ークへいけるわけではありません。家族がいて親がいて友がいる。この社会の一点が、私たちの生きていく場なのです。齒がゆいですが、がんなどの人生転覆の病をしても、国定忠治親分のように捨てられない夫がいて子どもたちがいるのです。

ですから、もう迷わずに、私たちがこの世に生まれてきて育てられた家庭、つくりあげた家庭、そして、愛し愛されている人たちとの心の輪、そのなかで精いっぱい生きることを決めるのです。

生きた証を残したい——この思いから、私たちのあせりが芽を出すわけです。生きた証、それはかならずしも目に見えるものとはかぎらない。これに気づくのに、私は十年かかりました。与えられた社会の一点のなかで精いっぱい生きれば、ともに生きた人たちの心のなかに私たちの生の証は残るのです。これがすばらしくなくて、なにがすばしいか、と私は思います。そして、精いっぱい生きるとは、一つひとつの仕事を心をこめてするということでしょう。大根を刻むのでも雑巾がけをするのでも、それだけのことですが、精魂こめてするのです。

さあ、やってみましょう。

そして今日からは、自信をもってカーテンを開き、カーテンを閉めましょう。朝には、一日のはじまりに胸躍らせ、夕べには一日の無事に感謝して、自分がいるこの地球上の一点に、しっかりと両足を押しつけて生きるのです。

勇気ある患者さんたちへ

癌研究会附属病院乳腺外科部長 霞 富士雄

私は、乳腺外科医ですから、一例ごとに細心の注意をはらって上手に手術を行い、それを次々と滞りなくつづけるのが役目です。手術から手術へと進む間に、さまざまな反省と工夫をこらし、体調をととのえて、少しでもよい手術を行うよう努力しています。

現在乳がんの治療法は多岐にわたり、手術に関することだけでもこまくなり、われわれ乳腺外科医が知っていなければならないこと、工夫熟練しなければならないこと等々、勉強することがたくさんあります。また手術に付帯する諸検査、化学ホルモン療法、放射線療法、リハビリテーション等、熟知しなければならないことも、数多くあります。

これ以外にもあります。患者さんの心の治療です。午前午後と手術室に入って乳がんの治療をしたつもりでいると、知らないうちに、患者個人個人の心の病をなおざりにしてしまうことが、よくあります。身を粉にして手術に没頭するのですが、それだけで患者さんはみな心身ともに元気になって退院し、社会復帰できるわけではありません。どの種のがんであっても、手術に対する不安、今までつづけてきた生活・家庭について、退院後の生活、復職について、後

療法について、将来について、悩まない患者さんはありません。

乳がんの場合、この悩みはとくに広範で強いものです。それはまず患者さんはほとんどが女性で、人生のなかでいちばん重要な年齢であることが多いからです。今まで生きること、夢中できて、生とか死とか、一度も考えたことがなかったのに、死という問題が急に入ってきた。そしてさらに、妻として母親として女性として、女性の美、精神の源とも感じられる乳房を失うという、冷たい現実には直面するからです。

私は、病室で外来で、この患者さんの数多い、底深い悩みの数々にふれます。検査に対する不安、手術に対するおそれ、家庭・家族のこと、夫、子ども、恋人、両親、兄弟との関係、仕事を中断することへの心配、復帰への不安、手術後の結婚・妊娠・出産、家庭生活、性生活、リハビリテーション、乳房装具、乳房再建への希望、がん再発への不安、化学ホルモン療法への不安、副作用、さらに、死と直面することの恐怖、生きることの喜び、そして不安、健康でいられることへの感謝等々、数かぎりがありません。

私はこれらの事項について、外科医として、できるだけ患者さんと対話していますが、悩みは多く広く深いもので、とうてい満足ゆくようにはなっていません。また、精神科医、心理学者、ケースワーカー、手術を体験した患者ボランティアなどの助力がなければ、と考えていますが、これは、そんなに簡単なことはありません。

冷たい言い方に聞こえますが、私は患者さんには、そういう他人に依存する解決法を求めるのではなく、基本的には自分自身の病氣の本質を理解していただき、病氣に対して強くなっていただきたいのです。それがなにより重要で、本質的だと思います。

人生、健康、生死……、一つひとつを、心のなかで解決していただく活力と勇氣をもってもらいたいです。悲劇の穴に閉じこもっても、なんら解決にはなりません。

手術後、残された人生を明るく生きようと暗く生きようと、本人の心がけ次第です。それなら、明るくすべてよいほうに解釈し、建設的な人生を歩むほうがどれほどよいことか。

この本の各項目の筆者は、すべてつらい思いをして手術を受けたかたですが、実に生き生きと明るく強く、手術の、そして手術後の悩みに向かっています。

これは、これから手術を受けようとしているかたがた、手術を受けてうちひしがれているかたがたの再起に、大きな糧となると思います。今まで日本では、このような内容の発表が少なすぎました。心より、この本の出版を慶びます。

元年四月陽春

私たちは生きる

乳がん37人の体験

目次

はじめに——生の証——

1

勇気ある患者さんたちへ

4

1 手術後に結婚しました

五月の大安吉日に結婚します

14

「あなたと結婚する、乳房とではない」のひと言に賭けた
命あつてのものだねだ——

24

19

2 手術後出産、授乳もしています

子どもは私の生きた証

30

どうしても、子どもは三人ほしかった

35

再婚後に手術、出産

40

妊娠七か月目に手術

46

3 もとどおりに働いています

美容院

54

床屋さん

59

学校の先生 64

4 後遺症・副作用に悩みました

むくみ 70

金木犀の香りが恋しい 74

臭覚・味覚を失って 79

髪の毛が、抜ける抜ける 85

5 転移・再発とたたかっています

肺に転移、そして手術 90

転移で転医 95

再建したのに再発して 101

6 乳がんは体質遺伝か？

母、姉、妹 108

母、娘 113

三姉妹 119

姉、妹 124

7 男性にも乳がんがあります

無縁のものと思っていたのに 132

この世の最後かと、あびるほどのんだ 135

8 乳房を再建しました

今でも迷いが残っている 142

欲をいえば、きりがありません 148

勇気をくれた新しい乳房 153

9 すぐに手術をしなかったことを悔いています

産婦人科に通いつづけても 158

宗教にすがる 163

九八パーセント良性です 168

10 再び生きる

がんと離婚——二つの大きな試練 176

ないないづくしの女だけど、女らしさだけは失いたくない

180

主人とお風呂に入って、心は春 184

たいがいのことは「死ぬよりまし」 188

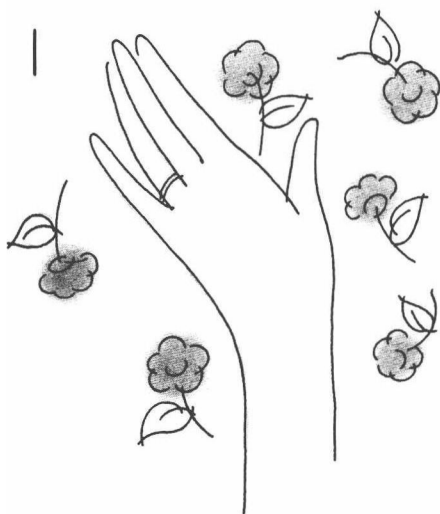
△再発体験座談会▽再発は終わりではない 195

あとがき 232

用語解説 236

下着でお困りのかたは…… 238

手術後に結婚しました



五月の大安吉日に結婚します

空　悦子（群馬）

二十六歳。私は短大を卒業して、地元の企業に勤めて五年たち、親友と念願の海外旅行を計画していました。そして、旅行から帰ったら結婚を真剣に考えよう、と思っていた平凡なごくふつうのOLでした。

そんなある日、お風呂あがりに「もっとバストラインが上がるのかっこいいのに」と、なにげなく両方の乳房を手でもちあげてみて「あっ」と思いました。右乳房の下にしこりがふれるのです。あわてて左側の同じところをさわってみても、そんな感触はありません。

「乳がんかな……」

胸にしこりといえば、それ以外に知らなかったの、とつさにそう考えました。「でも、まさか……。私はまだ二十代だし、そんなことありっこないわ」と自分に言い聞かせ、そんなことは忘れようと思いました。でも、ちよつとのけがや痛みで大騒ぎするのが私の性格で、一度心配しましたらお医者さんにいかなければ気がすまないのです。今から思えば、「いい性分」だった

のです。一か月たらずのうちに「婦人科」の病院にきました。昭和五十九年五月十六日のことです。そこで、「お乳のしこりは外科の病院でみてもらってください」と言われ、翌日、近くの総合病院の外科にきました。乳房をみてもらうのが恥ずかしいという気持ちには、私にはまったくありませんでした。それより、「なんでもありませんよ」と言われ、安心してはじめての海外旅行にでかけたかったのです。

針でとったしこりの細胞は病理検査にまわされ、二週間後に結果が出ました。「とった細胞が少なくてよくわからなかったので、できればしこりを全部とって調べたい」と言われましたが、二十六歳という年齢と、結婚前で少しの傷でもつくりたくないという私の願いで「三か月」の猶予があたえられました。そして、念願の「カナダ旅行」にでかけたのです。心配をかかえたままでしたが、夢がかない、すばらしい十日間でした。

九月に入つてすぐに再度細胞診をして、「やはりしこりを全部とって調べる」ということになり、九月二十一日に外来手術。六日後に「乳がんです」と、母親とともに宣告され、すぐに入院が決まりました。病院でも二十六歳の乳がん患者は最年少と言われ、さすがにショックでした。でも、「命さえ助かればいいし、しこりもほんの一センチくらいの小さなもので、ごく初期だから」と、わりと落ちついてもいました。手術の結果、リンパ節転移はなく、薬も必要なしとのこと。ラッキーな患者で、思ったほど精神的にも落ちこまずにすみました。